

編集後記

99年度は連続企画で「女性と健康」というテーマのもとに、ピルの解禁に関わること、また環境ホルモンに関係することなど社会的に大きな関心事となっていることが取り上げられた。これらは女性はもとより男性、そしてもう少し大きく捉えるならば生態系全体の問題でもある。ただ、この種の問題はマスコミの先走った取り上げ方で振り回されることも多い。女性学インスティテュート内での討論会などがあってもよいように思う。(S. K.)

今回の特集号のテーマを編集会議で思いめぐらしていたときから、あっという間に一年が経ち、発想もアプローチも異なる興味深い論文が続々と現われ楽しくもあった。懸賞論文の実現にはいかばかりか多くの方々の尽力があったことか。毎年若い研究者の卵の切磋琢磨の場が展開されますように。(R. M.)

去年本学にもようやくセクシュアル・ハラスメント防止に関するガイドラインおよび「相談・苦情窓口」が設けられ、よろこんでいます。ただ S. H. を生み出す土壌は、例えば「女性は職場の花だ」というような一見性的意図の見えにくい言動や女性の発言を拒む職場の雰囲気にあります。固定化した性別役割意識をほぐし、よりよい環境を作ってゆきたいものです。(K. M.)

「女性学」的発言は、統計が有効な社会科学の枠内にある場合には、告発してもかなりの元気よさを見せるのだが、今回のテーマ「病い」を自分なりに考えて思ったのは、解剖学的証言の提出が「ああ、そうですか」という感想ぐらいしか引きださないように、ここで性別を際立たせて論じようとする、「何をしているんですか」と言われかねないということだった。(T. U.)

なにはともあれ学生懸賞論文が選ばれ、巻末を飾ようになったのは同慶のいたりです。ただ、畑違いの領域ですと学生の書いたものでも評価することがむずかしいので、審査員の選出方法にはもう一工夫が必要かと思われます。ま、そんなことを言えば、老大家が集まって審査する各種のコンクールや文学賞だって問題はあるわけか。(K. Y.)

